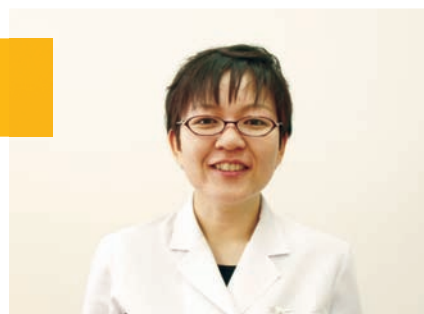


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第8回

株式会社ファーマシイ 山根暁子



在宅チーム医療の現場では、薬剤師も重要なインフォームドコンセント(IC)の場に同席する。

「治療の分岐点決定を密室で行わないこと。決定の前後に起こる患者さんや家族の心の揺らぎをケアするために」。ドクターからはっきりとそう言われたわけではないけれど、ケアにかかわる他職種がその場の同じ空気を吸うのは、在宅緩和ケアにおいてとても大切なことだと経験を通して実感するようになった。

「何もかも、先生にお任せします」。リビングウィルの確認とも言い換えられるICで、ときどき患者さんがこんな言い方をする。

——たとえば、嚥下機能が悪く、飲んだ水、食べたものが気管にいく「誤嚥」が多くなってきた患者さん。今後も嚥下機能の回復は困難な方。口から栄養がとれなくなったら、どうしたい？胃ろうをしてほしい？

たとえば、医療用の麻薬を使っても痛みやしんどさが取れない患者さん。痛みを感じなくするために、残った時間を眠って過ごす「セディーション」をしてほしい？

今よりも体調が悪くなり、辛い時間が増えたら療養場所はどこがいい？このまま自宅？それとも病院？——

「得てしてうれしくない状態になったら、どうしたいか？」の質問に対する答えだ。少し投げや

りな気持ちから前述のように言う人もいる。私には推し量りようがない思いを抱えて、同じ言葉を発する人もいる。

ドクターという仕事のその責任の大きさにいつも脱帽する。患者さんが生殺与奪の権利を全権委任してきたら、私たち薬剤師の中にそれを受け止められる人はいるだろうか。パターナリズムという言葉は、しばらく前からマイナスイメージのみ語られるようになったが、それでもなお、社会の中に医療の最高責任者、治療方針決定者としてしっかりと認知され、日々の仕事の中でその重圧にきちんと答えを出しつづけている姿は、やはり理想の父親像とかぶるものがある。

私の尊敬する先生たちは、患者さんに「お任せします」と言われたときに、皆さん一度は、その期待を引き受ける。「わかりました」と。大げさな言葉を使うと、その瞬間、医師と患者さんとの間に本当の意味での命の契約が結ばれたように思う。そのうえで、変更可能な意思決定の患者さんの権利を、言葉を変えてもう一度伝える。

2人のその信頼関係を助けるために誠心誠意がらんぼう、といつも奮起させられる。手柄はチームみんなで分け、負担はひとりで背負う、チームの大事な「お父さん」をもっとしっかりと手助けできるコ・メディカルにならなければ。そんなふうに思う。